

Title	編集後記 奥付
Sub Title	
Author	植木, 憲二
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1953
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.46, No.2 (1953. 3)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19530301-0065">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19530301-0065</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

そうであるとする、彼は價值對立の理解ということと、その對立の和解ということとの關係について、更に明らかにする義務を負うことになる。彼は、人間が常に相争つてゐる、不完全な存在であるという「運命」を互に認識しあうところに倫理性が生まれるように論じているが、理解することと、和解に導くという態度とは、次元を異にするものである以上、この説明だけでは納得し難いものがある。

又、彼の立場が、ある價值原理を、主張しようとするものではなく、經濟一般の内部に存在する倫理性を認め、これを理解することとまざるものであるとするならば、それはそれとして首尾一貫したものにはなるかも知れない。しかしこの場合には、彼の「經濟哲學」の體系が、どれだけの現實的意味を有するかということが、あらためて問題にされてよいのではないだろうか。

社會經濟的現實と、人間の價值的態度の關係に目をむけて、其處に問題を求める行き方には、三つの大きな流れがある。一つは、社會哲學的に價値を主張し、それによつて、現實の社會經濟的制度にたいして、一定の立場をとらうとする倫理主義の立場であり、(その一例としては、F. H. Knight, Freedom and Reform 1947 がある。) 第二は、諸々の價値理念が、現實の經濟的政治的要請に、どのように結びついてきたかという點、イデオと現實との間にある、きわめてプラグマティックな意味に於ける、歴史的具體的關係を理解するという立場(イデオロ

ギー批判)、第三はマルクシズムの立場である。彼の、經濟哲學の意味するところのものが、之等三つの立場のいずれにも屬さないとするれば、それは實際上、いかなる意義をもつ業績を示し得るのであるか。われわれの疑問は、この點に集中されてくる。之に對する解答が、彼の今後の著述において、現實的になされることを、私は期待したいと思う。(完)

編集後記

「朝鮮戦争の早期解決」の看板で大統領になつたアイゼンハワーが宣言した、外交政策中、中國海上封鎖と蔣政権の中立解除(イコル本土進攻)は英國はじめ歐洲方面の御氣げを損じたため、どちらやら蜃氣樓的現象となり、國際間の「密約破棄」という勇敢なかけ聲も最近では「曲解した解釋や適用を一切認めない」という後退的表現に轉化してしまつた。彼の外交政策を彼自身「一貫性ある、確信に満ちた」と呼んでゐる。「一貫性」と轉化の二律背反を、彼がいかなるロジックで統一してゐるかは知る由もないが「確信に満ちた」という表現が示す意欲だけは認めてもよさそうである。

ダレス國務長官は、「歐洲防衛共同體制」の促進に熱中し、軍事・經濟援助という傳家の寶刀を抜いて、七十五日の期限付きで、關係各國にイエス・ノーを迫つた。「人の噂」の有効期限一ぱいの坐り込み戦法である。

ダレスは四、五月頃日本を再訪すると傳えられるが、この情勢を迎える吉田首相は「再軍備を強いたり、朝鮮へ兵隊をもつていくような、世論が承知しないことを要請することはないと思う」(二月六日衆院豫算委員會)と事もなげにいう。「併し、アメリカの外交政策は明らかに……」などと反問しようとするれば、いきなり「黙れッ！」と來そうな空模様である。

ようやく、ほころびかけた雷も散り、心も凍る思いである。しかしわれわれの分野である、眞理探究の火は國と民族のあるかぎりえんえんと燃え續けるであらう。(植木憲二)

昭和二十八年二月二十五日印刷	昭和二十八年三月一日發行
第四十六卷	定價 七拾圓
第三號	送料 四圓
編輯者 高村象平	發行所 東京都港区芝三田慶大經濟學部内
印刷所 川口芳太郎	東京都港区芝三田慶大經濟學部内
豫約購讀料	一年分 金八四〇圓(送料共)
	半ケ年分 金四二〇圓(、)
發行所	東京都港区芝三田二丁目
	慶應義塾經濟學會